令和7年度「全国学力・学習状況調査」の結果
ー分析から見えてきた成果・課題と今後の取組についてー

区　　名	平野区
学 校 名	大阪市立平野西小学校
学校長名	中元　浩二

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和７年４月17日（木）に、６年生を対象として、「教科（国語・算数・理科）に関する調査」と「児童質問調査」を実施いたしました。

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様等に説明責任を果たすとともに、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、各学校が調査結果や調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにしてまいりましたので、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

１　調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

２　調査内容

(1) 教科に関する調査

・国語
・算数
・理科

(2) 質問調査

・児童に対する調査
・学校に対する調査

３　調査の対象

・国・公・私立学校の小学校第６学年の原則として全児童
・大阪市立平野西小学校では、第６学年　９４名

学校名　大阪市立平野西小学校

令和７年度「全国学力・学習状況調査」結果の概要

　平均正答率は、国語が６３％、算数が５４％、理科が４９％で、全教科で大阪市平均と全国平均を下回る結果となった。特に、国語は「C 読むこと」、算数は「C 測定」、「C 変化と関係」、理科は「生命」に関する領域の平均正答率に、全国平均との大きな差が見受けられた。
　平均無解答率は、国語が全国平均を下回っており、比較的解答率が高かったと言える。一方、算数と理科は大阪市平均と全国平均ともに上回っており、特に、考えたことを説明する「記述式」の問題における無解答率の高さが顕著だった。

分析から見えてきた成果・課題

教科に関する調査より

［国語］
今年度も昨年度同様、漢字の書き取り問題において、正答率が大阪市・全国ともに上回る結果が見られた。これまでの漢字学習において、学年の実態に応じて、熟語集めや短文作りをする学習を取り入れ、単に漢字を「覚える」のではなく、「使える」ようにするための取組みを重ねてきたことの成果と考える。一方で、問題となっているのは、記述問題の正答率についてである。特に、複数の解答条件がある設問で、一部の条件を満たせず誤答になっていることが、本校の特徴と言える。その原因は「書く力」だけでなく、主に「読む力のつまずき」に起因していることが多いと考えられる。第一に、「設問の条件を正確に読み取れていない」ことが挙げられる。また、設問文を読んだあと、すぐに書き始めてしまい、本文をしっかり参照できていなかったり、設問の条件が反映されていなかったりすることも、よくある「つまずき」であると考える。このように、記述問題のつまずきは、「書く力」だけではなく、「設問を読む力＋本文を読む力＋両者をつなぐ力」のいずれかの弱さから生まれていると言える。これには、「設問文の条件が書かれた部分（何を書く？どう書く？）」に線を引くこと、設問と答えの言葉遣い・書き方を「ぴったり対応させる」練習や、書く前に「設問をもう一度読む」習慣をつけることが効果的であると考えるため、「なぜこう書いたのか？」という意図をたずねるなど、「読むプロセス」を評価・支援する視点をもって読解力を育成することが課題である。
［算数］
注目した点は「割合」に関する出題で、例えば、「10%増量した内容量は、増量前の0.1倍になる」や「10%増量した内容量は、増量前の10倍になる」という誤答についてである。正しい考え方は、「元の1倍＋0.1倍＝1.1倍」となり、一見極端な誤りに見えるが、本校の正答率は34.8%、全国的にも正答率が40.9%と低く、小学生がよく陥る割合に関する理解のつまずきが表れている典型的な例と言える。誤答の要因として、前者は、「10%」という表現を見て、「10%＝0.1」までは知っていても、「10%増量」＝「0.1倍になる」と 思い込んでしまうという思考のつまずきが考えられる。「10%」という表記を見た瞬間に、「小数に直す → 0.1」までは知識として定着していても、「それをどのように活用するか」、「何に対する0.1か」という判断ができていない状態である。一方、後者は、「10%」という数字を見た瞬間に「10」という数に強く引きずられ、「10倍」と安易に結びつけてしまったことが考えられる。これは、「%」と「倍」の意味の違いをしっかり理解できていない状態で見られる誤りである。どちらについても、割合を「関係性の量」として理解できておらず、単なる数字の変換問題として処理してしまうため、誤答につながったと考えられる。子どもたちは、数や言葉の印象に引っ張られて直感的に答えを出してしまうことがよく見受けられる。国語科の「読む力」同様、算数科においても、問題文の文脈を読み、問題場面に合った式を立てるという「読解力」を育てることが課題である。
［理科］
「エネルギー」を柱とする領域、特に「電気」に関する問題の正答率は、大阪府、全国をともに上回る問題が複数あり、実験をもとに知識がしっかりと定着していることがうかがわれた。これは昨年度、理科補助員が中心となって在庫の実験器具を見直し、教科書に掲載されている実験をそのまま実施できるように整えたことで、教員の準備負担が軽減され、積極的に取り組むことができるようになった成果と考える。一方、出題内容から読み取ることができる問題もあった。例えば、設問の資料から新たな問題を見いだし、「問いを立てる」形で表現できるかどうかを問う出題や、「理科で学習したこと」に関連付けて、「学習したことをもとに考えたこと」について思考して表現できるかどうかを問う出題については正答率が低かった。このことから、毎回の学習の振り返りに十分な時間をとることで、学習したことや日常生活の中で疑問に思ったことや驚いたことなどから新たな問題を見いだしていく過程を経験させたり、習得した知識を他の学習や生活に関連付けて整理させたりして、主体的に学びに向かう力を育てることを意識して授業を改善することが大切であると考える。

質問調査より

大阪市・全国よりも肯定的回答の割合が高かった質問には、（６）「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」があった。昨年度同様、教職員の関わりが児童らに肯定的にとらえられ、信頼関係を築くことができていると考えられる。また、（１１）「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」においても、大阪市・全国よりも肯定的回答の割合が高く、児童らの社会的役割や貢献意識の高まりがうかがわれる。一方で、（５）「自分には、よいところがあると思いますか」においては、大阪市・全国よりも否定的回答の割合が高く、これら（１１）と（５）の回答結果から、「自分にはよいところがない」と思いつつも、「人の役に立ちたい」とは感じており、「他者への貢献を通じて、自分の価値を見いだそうとする」傾向があると推測される。こうした傾向から、教職員が日常的な関わりの中で、「役立つこと＝児童自身のよさ」へとつなげる言葉かけや活動を意識することで、児童のウェルビーイングの基盤を形成することが課題であると考える。

今後の取組(アクションプラン)

○校内研究において、大阪市が推進する「総合的読解力の育成」を主題として取り組んでいる。これをもとに、文章だけではなく、図・グラフ・表などからも情報を正しく読み取り要約する活動、読み取ったことをもとに考えるための技法を活用し考えを整理する活動、互いの考えを交流し協働して考えを広げる活動、交流した考えを文章やプレゼンテーションにまとめて表現し思考を深める活動を通して、本校の課題である読解力とともに、思考力・判断力・表現力の育成を図る。
○令和７年度「全国学力・学習状況調査」の結果をもとに、学力向上支援チーム事業のスクールアドバイザーと連携して校内研修を実施し、若手教員を中心に、国語科における教材研究の仕方や指導計画の立て方、読解力を育成するための指導法などの基礎をかため、授業改善に取り組むことができるようにする。
○児童が互いに認め合い、自己肯定感を高めることができるよう、児童会を中心に児童の発案をもとにした取り組みを積極的に進めている。
○令和７年度「全国学力・学習状況調査」および「すくすくウォッチ」における児童質問紙の結果分析を全教職員で共有して児童理解の参考にし、学年・学級経営に生かすことができるようにする。

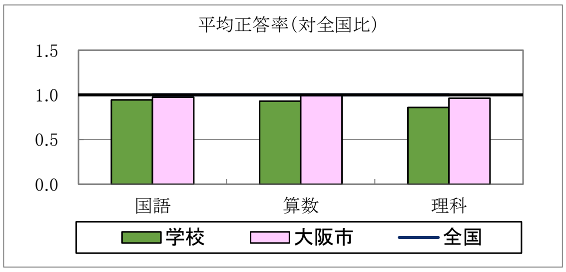
【　全体の概要　】

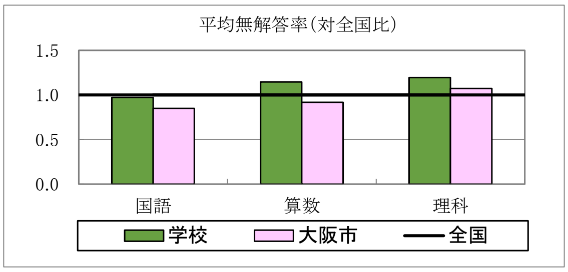
平均正答率（%）

	国語	算数	理科
学校	63	54	49
大阪市	65	58	55
全国	66.8	58.0	57.1

平均無解答率（%）

	国語	算数	理科
学校	3.2	4.1	3.3
大阪市	2.8	3.3	3.0
全国	3.3	3.6	2.8



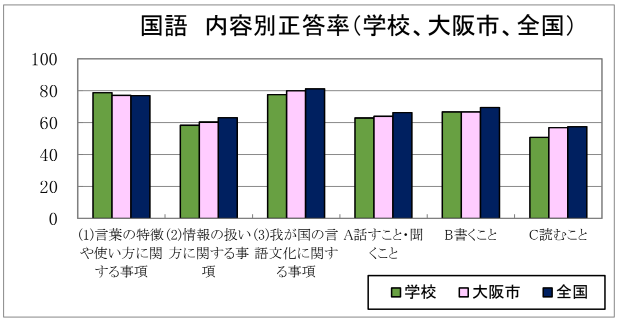


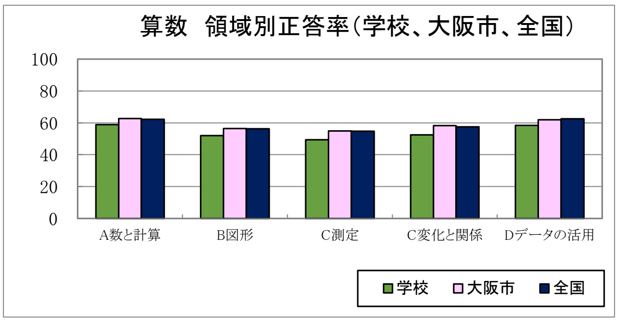
【　国　語　】

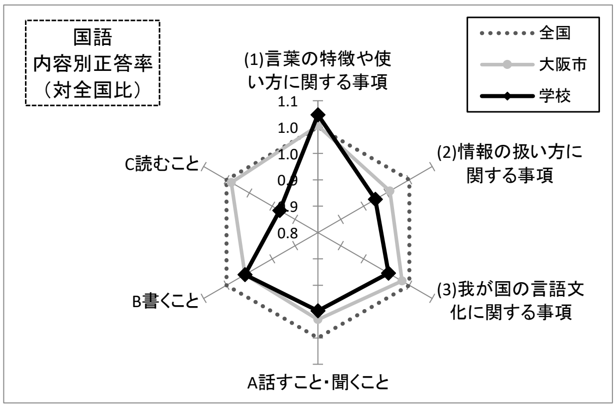
学習指導要領の内容	対象設問数(問)	平均正答率(%)		
		学校	大阪市	全国
(1)言葉の特徴や使い方に関する事項	2	78.7	77.1	76.9
(2)情報の扱い方に関する事項	1	58.4	60.4	63.1
(3)我が国の言語文化に関する事項	1	77.5	79.9	81.2
A 話すこと･聞くこと	3	62.9	64.0	66.3
B 書くこと	3	66.7	66.7	69.5
C 読むこと	4	50.8	56.9	57.5

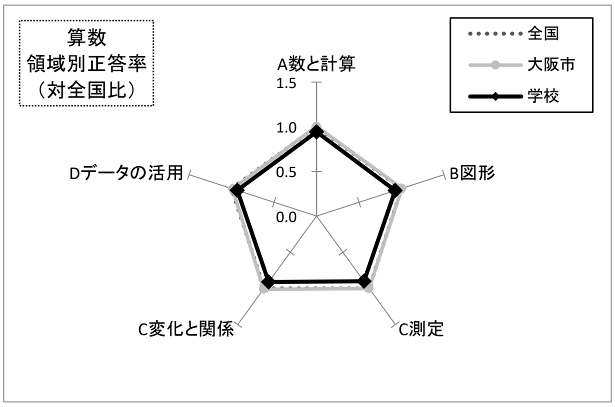
【　算　数　】

学習指導要領の領域	対象設問数(問)	平均正答率(%)		
		学校	大阪市	全国
A 数と計算	8	58.8	62.7	62.3
B 図形	4	52.0	56.4	56.2
C 測定	2	49.4	54.9	54.8
C 変化と関係	3	52.4	58.2	57.5
D データの活用	5	58.4	61.9	62.6



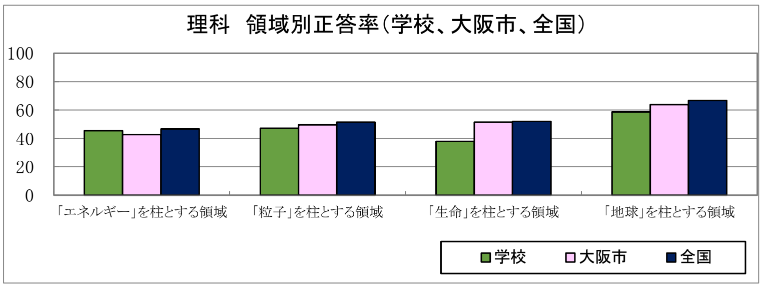


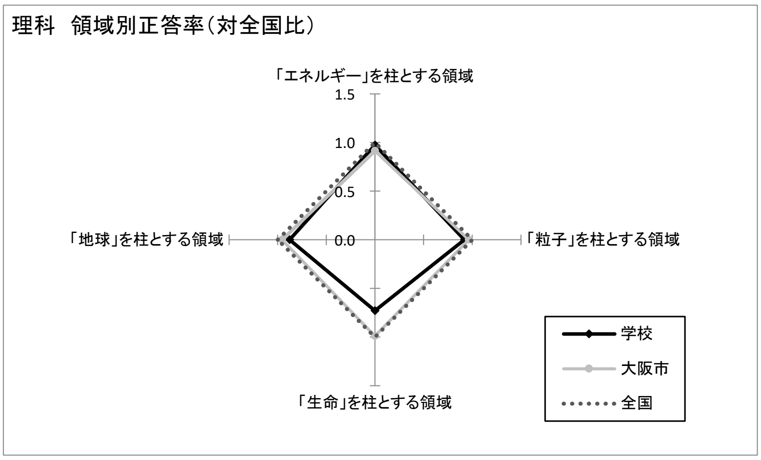




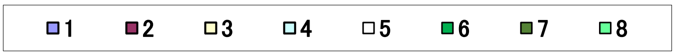
【 理科 】

学習指導要領の区分・領域		対象設問数(問)	平均正答率(%)		
			学校	大阪市	全国
A区分	「エネルギー」を柱とする領域	4	45.5	42.7	46.7
	「粒子」を柱とする領域	6	47.2	49.5	51.4
B区分	「生命」を柱とする領域	4	37.9	51.4	52.0
	「地球」を柱とする領域	6	58.6	63.8	66.7



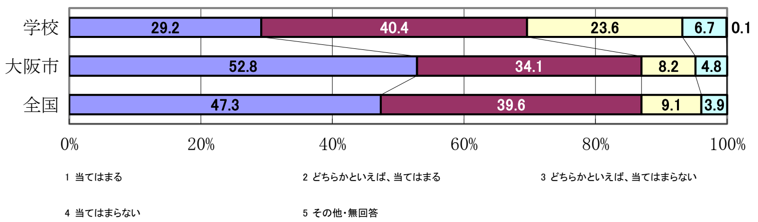


児童質問より

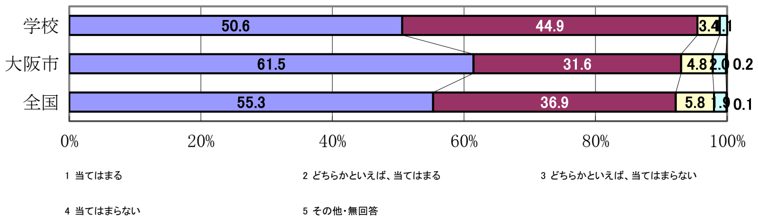


質問番号
質問事項

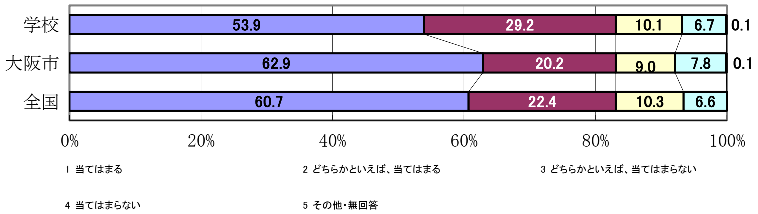
5
自分には、よいところがあると思いますか



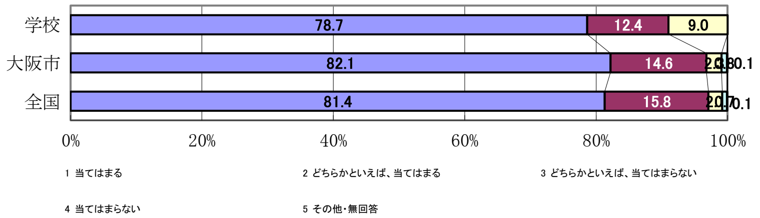
6
先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか



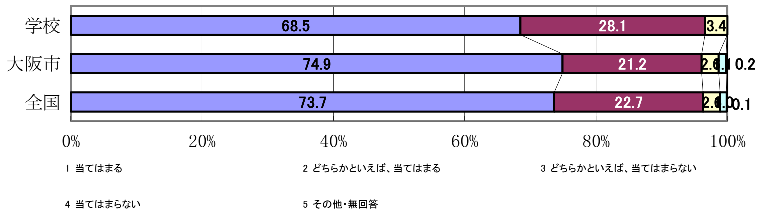
7
将来の夢や目標を持っていますか



9
いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか



11
人の役に立つ人間になりたいと思いますか



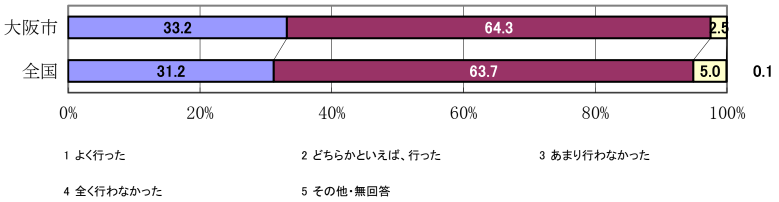
学校質問より

質問番号
質問事項

42

調査対象学年の児童に対して、前年度までに、国語の授業で、児童に学習の状況について改善すべき点を伝え、改善できるように手立てを講じることを行いましたか

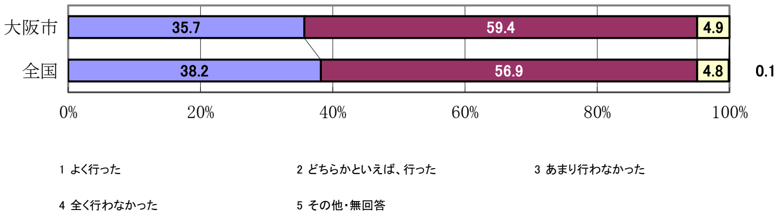
学校　「どちらかといえば、行った」を選択



46

調査対象学年の児童に対する算数の授業において、前年度までに、具体的な物を操作するなどの体験を伴う学習を通して、数量や図形について実感を伴った理解をする活動を行いましたか

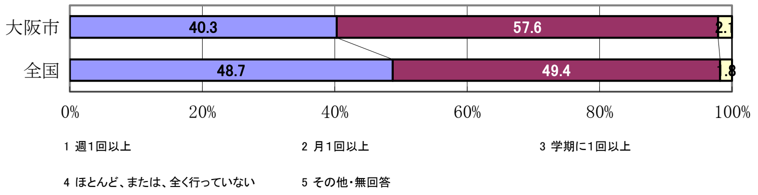
学校　「どちらかといえば、行った」を選択



54

調査対象学年の児童に対する理科の授業において、前年度に、児童が観察や実験をする授業を1クラス当たりどの程度行いましたか

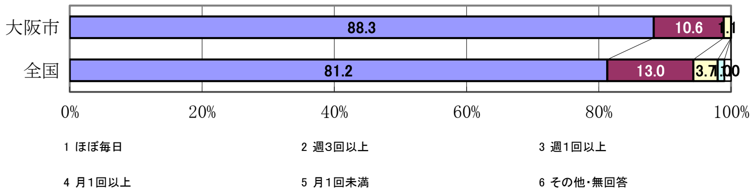
学校　「週1回以上」を選択



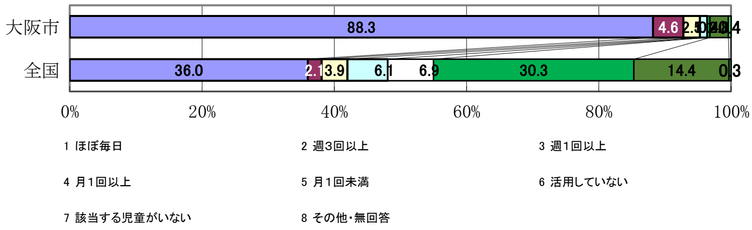
55

前年度に、教員が大型提示装置等(プロジェクター、電子黒板等)のICT機器を活用した授業を1クラス当たりどの程度行いましたか

学校　「ほぼ毎日」を選択



67_5

児童一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器について、次のような用途でどの程度活用していますか。(5)児童の心身の状況の把握

学校　「ほぼ毎日」を選択